

第Ⅲ部 わが国における仏教図像と経典

はじめに

本第Ⅲ部では、第1章中宮寺天寿国繡帳と『法華経』、第2章 法隆寺夢殿八角円堂と本尊、第3章 薬師寺東塔擦銘と本尊の『薬師経』、第4章 法隆寺金堂四大壁画と経典の4章によりわが国における仏教図像と経典の関係を考察している。

第1章では、斑鳩の中宮寺所蔵天寿国繡帳について、繡帳の断片と先達が種々検討された内容を吟味して、典拠と主題を考察している。

現在の天寿国繡帳は、上中下3段各左右の全6景に分かれている(図3-1.3.6.9.10.12)。記録は『上宮聖徳法王帝説』¹が古く、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』²の記事が、鎌倉時代に発見されたことを記す『聖誉鈔』³の文に符合する。『法王帝説』と宮内庁書陵部所蔵の『中宮寺尼信如祈請等事』には、亀甲上に4字ずつ記された銘文の記録がある⁴。

その後、鎌倉時代に中宮寺の尼信如による法隆寺での旧繡帳の発見があり、京都の天台僧定円に依頼して解説と新繡帳の作成が行なわれた⁵。現在遺存する天寿国繡帳は、この新旧双方の断片が混在し、意外にも色の褪せた方が新繡帳の鎌倉期のものである⁶。

そこで、この天寿国繡帳に描かれた天寿国がどのような浄土を指しているかについて、大橋一章氏の著作をもとに、各説のポイントと問題点をあげて、各図における典拠と主題の解きほぐしを行なっている⁷。

第2章では、中国北京大学の宿白氏が1951年「敦煌莫高窟中的五台山図」で、図の全般にわたる問題を提起したところに発端を見出している。すなわち、この五台山の八角の建物は、大仏光寺と大法華寺の間にある欠名の寺院で、八角の仏殿は敦煌壁画では珍しく、日本の

¹ 狩谷望之証註『上宮聖徳法王帝説』(『群書類従』4輯巻64, 1893, 『大日本仏教全書』112, 聖徳太子伝叢書, 仏書刊行会, 1912, p.43-48)。

² 行信等『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』天平20(748)年(『大日本仏教全書』117, 寺誌叢書1, 仏書刊行会, 1913, p.1-26)。

³ 聖誉『聖誉鈔』応永13(1406)年ころ(『大日本仏教全書』聖徳太子伝叢書, 仏書刊行会, 1912, p.483)。

⁴ 諸研究を経て今日に至った銘文の紹介は、大橋一章, 下掲注7著書, p.145に記されている。

⁵ 定円『太子曼荼羅講式』(『聖徳太子全集』4, 石田茂作編, 臨川書店, 1988, p.13。『聖徳太子全集』の初版は、龍吟社, 1942~1944)。

⁶ 太田英蔵「天寿国曼荼羅の繡技と建治修理について」(『史跡と美術』188, 1943)。

⁷ 大橋一章『天寿国繡帳の研究』(吉川弘文館, 1995)。

法隆寺夢殿に見ることができるとの指摘である⁸。

記録のスライドを NHK で閲覧した結果、八角堂回廊左手の黒く短冊状にみえる標識は「□□経論蔵」と判読できたが、寺院名は記されていない、他の部分でも壁画の画面はかつて描き換えがあり、その折説明文にも変化があったことを示していた。

そして、壁画に描かれた建物の状況から八角仏殿の建物と大法華之寺が何らかの関係にあることを、わが国の興福寺、栄山寺、広隆寺など、いずれも八角堂が本寺の附属堂宇としてあることで確認し、この八角仏殿が大法華之寺との関係においてとらえることが可能であることを基点とした。

そして、五台山図の八角円堂は大法華之寺に所属する一院で、『広清涼伝』にいう神英和尚の法華院にあたること。わが国法隆寺の夢殿は、建立者行信とその信仰内容から法華経と関係があること。夢殿の本尊は手印から判断して太子を『法華経』安樂行品第 14 の転輪聖王に見立てた可能性があることなど。その後、五台山もわが国も華嚴思想の下で発展するが、ともに天台の法華思想の影響を受けた状況も続くことを明らかにしている。

第 3 章では、今日に至る薬師寺移建非移建問題のいわゆる薬師寺論争を整理し⁹、東塔の檫銘（図 3 - 31）における配列の歪み、古文献の引用の誤写、また文字そのものの誤り等、いくつかの疑われる点や、追刻、転写、模刻という方法上の解釈から派生する檫銘の真偽を問う問題を検討し、その信憑性を明らかにした。

また科学的分析で、檫管上の水煙と現金堂月光菩薩の銅の組成が一致し、現本尊薬師如来の台座内で発見された和銅開珍銭が、文字の形態からみて養老 4 年（720）を遡らない新鑄銭であるとの報告から、現薬師寺の移建されたものでないことをこれらが裏付けていることを明らかにしている。

そして本尊と『薬師経』の関係について、4 本ある薬師経を検討し¹⁰、隋・達摩笈多訳『薬師如来本願功德経』が典拠となることを導き出している。

後段では、縁起にいう薬師寺の第三本願に元明太上天皇をあてる説に対して、縁起の性格や文献による元明帝の動き、当時の祭祀と仏教の位置づけなどを検討して、祭祀中心の遷都事業をすすめた元明帝がそのまま仏教の薬師寺移転の完成者とはならないことを明らかにしている。

第 4 章では、昭和 24 年（1949）の修復作業中失火によりその壁画のほとんどを焼失した法隆寺の金堂について¹¹、焼失後の先学の研究と、残された写真、模写等を通して考察を行

⁸ 宿白「敦煌莫高窟中的五台山図」（『文物参考資料』2-5,1951,中国・同編輯委員会,p.59）。

⁹ この論争における各氏の論文は本文の脚注 p.229 を参照されたい。

¹⁰ 東晋・帛尸梨蜜多羅訳『灌頂経,第 12(薬師瑠璃光経)』（『大正蔵』21,p.532-536）, 隋・達摩笈多訳『薬師如来本願功德経』（『大正蔵』14,p.401-404）, 唐・玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功德経』（『大正蔵』14,p.404-408）, 唐・義浄訳『薬師瑠璃光七仏本願功德経』（『大正蔵』14,p.409-418）。

¹¹ 壁画焼失を伝える記事に「特集失われた法隆寺壁画」（『仏教芸術』3,毎日新聞社,1949）がある。

っている。

はじめに金堂壁画の主題を四方四仏とする根拠について、法隆寺の古記録『太子伝古今目録抄』や『太子伝玉林抄』¹²、『興福寺流記』五重塔条などからみて、法隆寺の場合も法相四仏であった可能性が高い点を検討し、方位にこだわらない答えを導き出している。

そして法隆寺金堂の四大壁画について、それぞれ経典の存在を確認し、一号壁が『無量義経』、六号壁が『観無量寿経』、九号壁が『薬師琉璃光七仏本願功德経』、十号壁が『観弥勒菩薩上生兜率天経』に拠ることを明らかにして、西暦 707-734 の間という制作年代の推定に及んでいる。

以上、第Ⅲ部のわが国における仏教図像と経典の関係では、わが国が受容した仏教の歴史を、第 2 章 法隆寺夢殿八角円堂と本尊や、第 3 章の薬師寺東塔檨銘と本尊の『薬師経』において取り上げ、わが国に流布した仏教経典について考察している。

また、この第 3 章で触れているが、最近明らかになった奈良斑鳩法隆寺南大門前の発掘調査で、法隆寺再建論争の『日本書紀』西暦 670 年罹災記事を裏付ける結果をもたらしていることを通して、発掘調査による新たな成果が遺構や出土品の様式や年代を確定し、研究の確信を深めたことを明らかにしている。

¹² 俊巖『太子伝古今目録抄』(嘉禄 3 年,1227), 訓海『太子伝玉林抄』(文安 5 年,1448), 亀田孜『法隆寺一壁画と金堂一』(朝日新聞社,1968.p.26)参照。